

気持ちを伝えるようにしよう

清宮 聡子

四月から始まった一学期も七月に入り夏休みを目前にしていた。フリーの保育者として毎日色々なクラスの子どもたちと関わる機会が多いのだが、この時期のどのクラスの子どもたちも活動範囲が広がるのだということを実感していた。その日の朝はこんなことを思いながら遊戯室にいと、年少組のK子とM子とS子が入口の方から駆け込んで来た。三人

は私を見つけると「先生！」と言いながら笑顔で走り寄って来た。彼女たちの部屋は遊戯室から一番遠くに位置している。遊戯室まで走って来たせいか、彼女たちの息が少し上がっていた。

三人は保育室と遊戯室の行き来を楽しんでいるようであった。遊戯室でしばらく走りまわるとそのままの勢いで保育室に向かって行ってしまった。三人

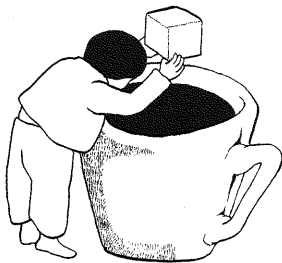
の中でS子は、他の二人に遅れをとるかたちで後を追っていた。私はS子の事が気になりついて行ったが、廊下の途中で再度遊戯室に向かおうとするK子とM子にすれ違くと、S子も方向転換し再び遊戯室に向かった。私も三人の様子を見に向かい遊戯室に入ろうとしたが、その必要はすぐに無くなった。K子、M子、S子らが次々に遊戯室から出てきたのだ。私は二度目の方向転換をすることになった。

三人がまた廊下を戻って来るかもしれないと思いながら年少児の部屋に向かおうとしたとき「せいみやー！」と呼ぶA夫の声が背後から聞こえた。一ヵ月程前からだろうか、A夫は時々私を「せいみやー」と呼ぶようになっていた。私はその声を聞くといつとも一瞬「どう返事をしよう」と戸惑った。同時にそんな風に呼ばなくても必ず答えるのにと切なさを感じた。この時も複雑な気持ちで振り向いた。見ると年中児の部屋に對面するようなかたちで、廊下に

カーペットが敷かれてある。そこにA夫はカマキリのパペットを手にはめて座っていた。

振り向いた時と変わらぬ気持ちでカーペットの端に膝を置いた。そして私はA夫に戸惑い気味に「A夫くん、先生は『せいみやー！』って呼ばれるの嫌なんだけど」と話しかけた。するとA夫は私の顔をしっかりと見据えながら強い調子で「せいみやー！」と言った。A夫の応えに私は、自分の気持ちがA夫にとつて受け入れがたいものなのかと実感した。けれども私のことをA夫が「せいみやー」と呼ぶ時に感じる違和感をA夫に伝えたいと思つた。また伝えることでA夫との関係も変わるのではないかと考えた。

注意する形で伝え



ることだけはしたくないと思いながら、いざ伝える
 となるとどういう方法が良いのか浮かばなかつた。
 とつさに私はA夫に「先生そういう風に呼ばれると
 A夫くんのことをくすぐりたくなっちゃう」と言っ
 て座っていたA夫の脇腹をくすぐった。くすぐりな
 がらも心の中では何だかごまかした様な事をしてい
 ると思つた。しかしA夫の反応は予想外に良かつ
 た。くすぐったそうに身をよじらせて笑うA夫の様
 子は自然だと思つた。「くすぐりたい振り」をして
 しまいかねない点があるA夫だったが、体の力は抜
 けていると思つた。A夫は私がかくすぐるのを予想し
 て「せいみや、せいみや」と二回繰り返し返した。その
 度に私はA夫をくすぐった。座っていたA夫は既に
 仰向けになって体勢を崩し私の顔を見上げていた。
 笑いながら「A夫はくすぐったがりなんだよ」と
 言つた。そう言われて思わずもう一度くすぐってし
 まつた。A夫は身をくねらせながら「A夫はお母さ

んにくすぐられると、もつとくすぐりたいんだ」と
 言つたので「そうなの、本当にA夫くんはくすぐった
 がりなんだね」と返した。そんなやり取りを続けな
 がらも私の伝えたい気持ちは伝わったのだろうか
 と思つた。
 そこへB夫が「卵を産んじゃうぞ」と言つてカマ
 キリのパペットを手にやつて来た。突然現れたB夫
 の行動が何だかとても面白くA夫も私も声を上げて
 笑つた。A夫も手にはめたパペットを動かしながら
 B夫のパペットと突き合わせて遊び始めた。廊下に
 目をやると遊戯室と保育室の行き来を楽しんでいる
 K子、M子、S子たちがそれぞれ人形を手にしたリ
 バギーを押ししたりしながらこちらに走つて来るのが
 見えた。私の姿を見つけるとK子が「先生、何して
 るの。大きいお部屋に行こうよ」と声を掛けてき
 た。すぐにこの場を立つことは出来ないと思い、K
 子に「先生もう少しここでお話してから行くね。

先に行つて待つていてくれる」と返した。

A夫はこのやり取りの間カーベットのの上に敷いてある布団を整えてカマキリを寝かせようとしていた。私はA夫に「K子ちゃんたちが待つているからちよつと行つてくるね」と声を掛けた。するとA夫は私の耳に口を近づけて「先生、戻つて来たらここに住んでね」と小さな声で言った。私はA夫の言葉に彼の素直な気持ちが出ていると思つた。また「住んでね」という表現に今までのA夫にはみられなかつた「柔らかさ」のようなものを感じた。私はA夫の気持ちに伝えるために必ず戻つてこようと思つた。そして「戻つて来るからね」と言い残して遊戯室に向かつた。

しばらくしてA夫の元へ戻つて来ると、A夫はカマキリを布団に寝かせていた。私は「戻つて来たよ。一緒に住んでもいいかな」と声を掛けた。するとA夫はこちらに体を向けて「いいよ」と答えてく

れた。私が靴を脱いでカーベットにあがり座ると、A夫は私の靴を手に取りカーベットの左端に揃えて置いた。そして右端に脱いであつた自分の靴を私の靴の隣に運び、揃えて置いた。A夫の細やかな行動に彼の温かい気持ちを感じた。

この後A夫とB夫と私はカマキリを交えてカーベットの“家”で楽しい時間を過ごした。この日のA夫との関わりはお互いの気持ちを伝えあうということがどういふことなのかを考えさせられた。同時にその大切さを強く感じた。二学期が始まり一学期同様A夫と関わる事もあるのだが、あの日以来私のことを「せいみやー」と呼びつける声はまだ聞いていない。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)